

劍客居酒屋草間

江戸本所料理人始末

松風勇水 Isami Matsukaze



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

辻斬始末

5

居酒屋縁談始末

30

凶賊非情始末

59

菜飯屋後始末

94

道場破面倒始末

120

剣術試合面倒始末

150

猪頭破落戸始末

188

冬吉不在醉人始末

222

柏屋不出来腕方始末

256

暗殺剣同門始末

287

辻斬始末

「はい、鯛いわしのなめろうだよ」

「おっと！ 待ってました。酒ももう一本くれ」

「はいはい。たと召よし上がれ」

元もと氣きの良よい老ろう婆ばの言こと葉はに、やはり元もと氣きよく、中ちゆう年ねんの男おとこが応こたえる。

男おとこはいかにも美う味まそうになめろうをつつき、いとおしむように酒さけを舐なめた。

さしてひろくはないが、掃はき除ぞの行いき届といた店みせ内うちには他ほかにも数かず名なの客きやくがいた。

給たま仕しの老ろう婆ばと、ままだ若わかい包か丁ぢやう人にんの店みせ主ぢやうだけだけで営いむ居い酒しよ屋やである。

この居い酒しよ屋やは、『肴さかなの美う味まい店みせ』として、本ほん所じよでは知しる人ひとぞ知しる店みせだ。

なめろうをつついている男おとこは伊い八はちという。

伊い八はちは腕うでの良よい大だい工こうで、本ほん所じよ界かい限げんの棟とう梁りやうの間までも評ひやう判はんが良よい。

流ながしの大だい工こうだが、仕し事じに困こまることはほとんどなく、忙いそしくない時ときはこうして毎まい日にちのよう

うに居い酒しよ屋やに現あらわる。

本所は伊八のような大工の仕事も多いが、浪人や無宿人などもたむろし、あまり治安はよくない。

伊八が毎日通う居酒屋『草間』ができたのは、一年ほど前のことである。主はまだ二十四と若い男だが、すらりとした長身に、地味だがいつもこざいかな装いをしており、近所の娘達にも人気がある。

細面で目鼻立ちには優しげ、眉はきりりとしていて、役者が務まりそうな美形だ。

この男、冬吉は無愛想というわけではないが、あまり自分のことを話したがいらない。それゆえに、ますます、娘達のあらぬ妄想を誘い、同年輩の男達からはいらぬやつかみを受けている。

因縁をつけられることもあるが、実際に喧嘩を売ってきた破落戸などは、軽くひねってしまふ程度には腕っ節も悪くない。

近所の道場で稽古をしており、棒きれ一本持とうものなら、五人や六人はあつという間に叩きつぶせるほどであるという。

喧嘩も剣術も一級品と言えるが、包丁の技もかなりのものである。

伊八がつづいている鯛のなめろうは、この店の名物だ。

どこで修行したかはわからないが、津々浦々の料理に通じており、値の張る食材は使わないものの、毎日通う常連を飽きさせることもない。

色男の若造に嫉妬するような歳でもなく、物静かな冬吉のことがすっかり気に入っているのだ。

酒も相当に吟味しているようで、実に美味しいのである。

伊八は五年前に女房を流行病で亡くしてからは独り身で、晩飯はほとんどこの店で済ませている。

だいぶ夜も更け、客も伊八だけとなった。

伊八もいつも通り、ほろ酔いで勘定を置いて帰っていったが、暖簾をおろした冬吉に向かつて、老婆のお静が素っ頓狂な声を上げた。

「あれまっ！ 伊八つつあん、大事な商売道具を忘れてるよっ！」

見れば、伊八のいた辺りの隅に、重そうな巾着が置いてある。

中は釘が入った小さな木箱で、修行時代に自分でこしらえたものだ。

肌身はなさず持ち歩いているものであった。

「お静婆、ひとつ走り届けてくるから、掃除が済んだら帰って休んでくれ」

「あいよ」

冬吉は巾着を持って、走り出した。

伊八が出てから少し経ってはいるが、酔いどれの千鳥足である。

若い冬吉が走ればすぐに追いつく。実際に、長屋までまだ半分程度の川沿いの道で見つけることができた。が、様子がおかしい。

夜目の利く冬吉には、伊八は腰を抜かしたようにへたり込んで、震えているのが見えた。その向こう側にもう一人、人影が見える。

わずかな月明かりに刃が光った。

キンツという音が小さく鳴った瞬間、冬吉は伊八の前に回り込んで身構えた。

冬吉がとつさに投げた釘を、夜の暗闇で、叩き落とした男は、頭巾で顔を隠していた。太刀を構えるその姿は、まごうかたない、一流の剣術家のものだ。

「できる……」

冬吉はつぶやいた。

釘を投げた技は、手裏剣術である。

幼少の頃に習っただけのものだが、それを暗闇で叩き落とすなど、尋常な腕ではない。血の滲むような修練の果てに得られる直感に、体がそのまま反応した。冬吉の目には、そうとしか映らなかつた。

もう一つ気づいたのは、太刀の刃がすでに濡れていることである。月明かりに照らされたそれには、ぎつとりと血と脂がついていた。

だが伊八は斬られてはいない。

素早く目だけで周囲を確認すると、大脇差を抜いた浪人風の男が倒れていた。

暗闇でよくはわからないが、おそらくはすでに事切れているのだろう。

右腕が切り落とされ、右肩から左脇にかけて、見事に袈裟掛けに斬りおろされていた。頭巾の男が右八双に構えた。

冬吉は釘を右手に三本持ち、いつでも投げられるように構えつつ、左手を前に突き出す。男が踏み込もうとした刹那、冬吉がぼつりとつぶやいた。

緊迫した場に似合わぬ、呑気な声で。

「逆風の太刀、新陰流か」

男の踏み込みが止まった。

刹那、冬吉が投げた三本の釘を男は跳び退くようにかわした。

川岸の草むらに飛び込み、用意の良いことに隠してあったのだろう、舟をこいで逃げていくのが、伊八を助け起こした冬吉には見えていた。

翌朝には、近所はこの噂で持ちきりであった。

辻斬りは実に三名もの被害者を出していたのである。

いずれも、本所界隈にたむろする浪人ではあったが、あの太脇差の男は、道場で目録

を授けられているほどの剣士であった。

伊八はその男が斬られた瞬間に出くわしたのである。

しかし、なぜか奉行所の同心や御用聞きからの取り調べがない。

早朝のうちには御用聞きに知らせてあるのに、奉行所は死体を引き取った後は、特に聞き込みをしている様子もない。

唯一の現場の目撃者であるはずの、冬吉と伊八に何も聞いてこないのはおかしいことであつた。

伊八は腰を抜かしていたので、冬吉が背負つて店まで連れ帰り寝かせていたが、昼頃には帰ろうとしていたのを止めた。

頭巾をしていたとはいへ、凶行の現場を見た人間を下手人が放つておくとは考えにくい。

伊八も冬吉も、今は命を狙われていると考えるべきであつた。

そうは言つても、夕刻にもなれば店を閉めているわけにもいかない。

仕入れに出かけるのは諦めたが、干物や味噌漬けにした魚、自分で作る豆腐だけでも店はやれる。

冬吉が辻斬りの下手人を退けたという噂は、近所中に知れ渡っていた。

どうやら、昼過ぎには仕込みの手伝いに出てきているお静が、出がけに言い触らして

しまつたらしい。

お陰で、この夜は大繁盛であつた。

伊八もいつも以上に調子よくお銚子を空けながら、その様子を大声で語っていた。

「冬吉さんの迫力つたら。野郎とおいらの間に入つて、すごんで見せた時のかつこ良さつたらつ。やつこさん、恐れをなして、しつぽ巻いて逃げていつちまつたつてえわけだ」

伊八は口も上手い。

講談師顔負けの語り口は、飲んだくれどもの拍手喝采を受けて、ますます調子づく。

『草間』はいつになく、にぎやかな夜となつていた。

わいわいと飲み騒ぐ店内で一人、入り口近くの隅っこに見慣れぬ客がいた。

と言つても、本所辺りには流れ者の浪人や無頼の輩、流しの職人など、新顔はいつでもいる。

ほとんどの客は気にもとめていなかった。

装いは地味だが、きれいに月代を剃つた粋な出で立ちで、両刀をたばさんだ武士である。

昨日の辻斬りよりやや体格もよい。

四十過ぎと見える男である。

静かに、しかし、伊八以上に美味そうに酒を呑み、豆腐の味噌漬けをつついている。

あれは手間はかかるが、酒のあてにはもつてこいの珍味であつた。

豆腐を水切りした後、さらして包んで酒とあわせた味噌につけ込んで作ったもので、ねっとりとしたうまみと食感が堪らない。安く良い魚が手に入らない時には、こうした豆腐を使った料理が主役となる。

酒呑みにも格がある。

酒の楽しみ方はそのしぐさや言動に表れ、十分に修行を積んだ酒呑みは、酒と料理の作り手、相伴する者や単に居合わせた者すら、心地よくさせるのだ。

この男はまさしく、それを持っていた。

「はいはいっ！ 今日はお開きだよっ！ 伊八っつあんも、今日はもう帰りなよっ！ 抜けた腰もはまってんだろっ！」

威勢よく客を追い出しにかかったのはお静婆。

そう言われて客達は渋々勘定を済ませて出ていく。

お静婆の癩癩を恐れてのことだった。

この老婆は江戸っ子らしい気っ風の良さと、人情味で慕われてはいるが、機嫌を損ねると面倒だということを、みんなが知っているのだ。

伊八も少しふてくされながら、勘定を置いて帰ろうとした。

「いや、伊八さんは、帰ってはいけない。辻斬りが待ち伏せしていたらどうする？」
冬吉がいつもより強い口調で言った。

「下手人があがるか、もう諦めただらうって頃までは、あの道を歩くのはやめた方がいい。すまないが、今日はお静婆のところに泊めてやってくれないか？」

冬吉の意外な言葉にお静は一瞬呆然とし、次に顔を真っ赤にして怒り出した。

「冬吉さんっ！ 帰りがあぶねえつてのはわからんでもないが、なんでこんな呑んだくれの、喧しい親父を、俺のうちであずからねえといけねえのさっ！」

「なにおうっ！ 喧しいのはどっちだいっ！ こんな癩癩持ちの婆の家で寝るなんて、俺だっごめんだった！」

いきり立って取っ組み合いを始めそうな二人を、冬吉は慌てて引き離す。

二人は冬吉が江戸にやってくる以前からの知り合い同士だが、近所でも名物の口喧嘩の敵同士であった。

「いや、わかった。泊めてくれなくてもいい。俺はその旦那と大事な話があるんで、ちよっただけお婆の家で待っていて欲しいんだ」

「……」

「頼むよ。二人とも……」

二人とも怪訝そうに顔を見合わせたが、冬吉の真剣な表情と迫力に押され、素直に店から出ていった。

「すまぬ、気を使わせてしまったようだな」

「いえ……」

冬吉は大柄な武士の言葉に相づちを打ちながら、新しく燗をつけた酒を用意し、自分も手酌で呑み始めた。

漬物を肴にして二人で酒盛りを始めるのであるが、冬吉はこの男を知っているわけではない。

「お武家様は奉行所の？」

「ふむ、そう疑ったか。少々違う」

やはり、美味そうに漬物をつつき、いとおしそうに酒を舐めてから、男はそう答える。「すると、火盗改の方で？」

冬吉の言葉に初めて男は驚いた顔をした。

それも一瞬のこと、にやりと口を歪めてから、再び酒を喉に流し込み、少し顔を赤らめ、ガハハと大きな声で一笑いしてから話し出した。

「なかなか鋭いな。火盗改同心、長山平三郎と申す。昨夜の件で二、三尋ねたくてな」

「しかし、辻斬りの件は凶悪とはいええ、火盗改の取り扱いは違うのではないですか？」先ほど同様、にやりと口元だけで長山同心が笑った。

火付盗賊改方は、江戸の町政全般を担う町奉行所とは別の、治安維持を専門とする

独立組織である。

本来、役方（文官）の奉行所と違い、番方（武官）であるため、機動力と武力に優れている。その役回りは、付け火と盗賊、それも大規模な盗賊団の取締りである。

スリやこそ泥をお縄にすることもあるし、治安維持が目的であるから、殺人も取り扱わないわけではない。

しかし、今回の辻斬りについては、すでに冬吉が奉行所に届け出ているため、火盗改が後から動き出すというのは、そうそう考えられることではないのだ。

「よくわかつているな。居酒屋の主が奉行所と火盗改のお役目の違いを知っているのか」察しが良いのは冬吉だけではなかった。

カマをかけられているのは冬吉にはわかっていた。別に隠し立てをするつもりはない。

「お察しの通り、元は十分でございます」

「どちらの？」

「草間冬士郎が元の名でございますが、生国と国を出た事情については平にご容赦ねがいます」

改まった態度でそう答えた冬吉を、長山同心はじっと見据えた。

「いや、そなたの事情はいい。聞きたいのは辻斬りのことと、そなたの腕前のことだ」

もう一度、すでにわずかにしか残っていなかったぐい呑みを仰ぐと、すかさず冬吉が酌をし、すぐに長山同心が酌を返す。

「先ほどの親父達の話、遠目から釘を投げたとのことだが？」

「手裏剣術をかじったことがございまして。しかし、暗闇の中でもあやつはそれを叩き落としてみせました」

「それは確かに恐ろしい手練れだ。どうやって追い返したのかな？」

特にここが聞きたいと言うように身を乗り出してきた。

もちろん、伊八の話にもこの件はあった。

しかし、剣術に明るくない大工にはわからないこともある。

その時に冬吉が口にした言葉は、伊八には理解できず、話からは省かれていたのだ。

「八双に構えた男が踏み込んだ時、そやつの流派がわかったので看破したまで。動揺の隙をついて再び釘を投げましたが、これはかわされ逃げられたという次第です」

「ほほう……なぜ流派が？ いや、そもそもどのだね？」

さも面白そうに聞いてくる。

とても、探りのために来ているとは思えない。

単なる剣術の談義のような気楽さであったが、やはり、目は笑っていない。

決して嘘や誇張は許さない厳しさが、ニヤけた口元から発せられる言葉に宿っている。

「新陰流と見受けました」

その刹那、ほんのわずかの一瞬だけ、長山同心の目が光ったのを冬吉は見逃さなかった。

新陰流は將軍家の流派である。

そして使い手は、江戸では旗本の子弟など、身分ある者に多い。

「なぜかな？」

長山同心に冬吉が語るその理由は、実に明快であった。

冬吉は先に斬られていた浪人を死に至らしめた技が、『逆風の太刀』であることをま

ず見破った。

刀傷は右肩から左脇に抜けている。

そして、右腕を切りとばされている。

辻斬りの構えは右八双、そのまま袈裟斬りにすれば、左肩から右脇に抜けるはずである。

逆風の太刀は最初に籠手を狙った斬撃をわざと外し、その隙に面を狙って打ち下ろされる腕を内側から切り上げるのだ。

そしてこれは、新陰流の技。

辻斬りは浪人を相手にして、右手を切りとばした後、そのまま右肩から左脇に切り下ろしたのである。

おそらくは、冬吉に対しても、わざと外した一撃の後に、釘を投げようとする瞬間を

狙って仕掛ける気であったのだろう。

冬吉はこの予測をそのままに答えた。

「ふうむ……しかし、包丁のこともなかなかだが、剣術の眼力も相当なものだな。新陰流を修めているわけではあるまいに」

「国元では中条流を学んだことがございしますが、あとは浪々江戸に流れるまでの間に、各地の包丁のこととともに見覚えただけにございます」

剣術の流派を教えることで生国の見当がついてしまうことは、この際諦めた。

中条流は加賀藩の辺りで盛んで、小太刀術が有名な流派である。

「その、新陰流の使い手だが……」

「旗本のご子弟ということでしょうか？」

「察しのよいことだ」

長山同心は難しい顔になる。

御用聞きが訪ねてこない理由がこれである。

この長山と名乗る同心が、聞き取りではなく、一客として現れ、閉店後まで残っていたのもこれが理由なのであろう。

身分ある者の縁者が下手人とあらば、おいそれと町奉行所や火盗改が捕縛することも難しくなる。

「奉行所だけでなく火盗改にまで圧力をかけてくるとなると、相当に権勢あるお家柄と
いうことでしょうか？」

火盗改は江戸の治安を守ることにについては、特別な権限を持ち、やり方も少々荒っぽい。
それでも手を出せないとなれば、圧力がかっただけでなく、相当に難しい事情も絡
んでいるのであろう。

「旗本の子弟が辻斬りを行ったなどとなれば、当然のごとくお取り潰しも免れ得ぬ。し
かし、取り潰すわけにもいかぬ家というのもあってな」

陽気な長山の言葉に初めて暗いものが漂った。

「しかし、このままでは辻斬りにあう者は増えるばかりだ」

おそらくは、下手人はわかつているのであろう。

にもかかわらず、辻斬りが止まることがないとなれば、手のつけられない人物という
ことになる。

仮に罪を追及できなくとも、身分ある家ならば、致命的なことになる前に不逞の輩を
自由にさせない方法はいくらでもあるはずであった。

「それでは、伊八さんを家に帰すこともできませんね……」

「伊八だけではない。むしろ、一番狙われているのは、そなたであろうな」

辻斬りの動機は、被害者とその腕前からおよそ想像がつく。

——新陰流の達者である下手人の腕試しであろう。

刀持ちの浪人ばかりを狙い、三人目には、かなりの腕前の男を斬っている。伊八だけは違うが、これは現場を見られたから斬ろうとしていたに過ぎない。

「見られたからではなく、斬れなかったために狙われるということですか」

「そうなる。そなたなら、むざむざと斬られることもあるまいが、丸腰はまずい」
冬吉は長山の意図を察した。

一度、自分の寝間がある二階に上がり、一本の刀を持って下りてきた。

「大脇差か。中条流を修めたというのであれば、またとないものだ」

「上州を回っていた際に買い求めたものです。無銘の安物ではありませんが」

武士でなければ帯刀は許されぬものの、大脇差は太刀には含まれない。

江戸であっても大脇差は、町人の姿をした冬吉が持ち歩いて、咎められない武器であつた。

長山は深く頷いた。

「ふむ、深夜の仕入れは危なかるうが、気をつけてな」

それだけを言いおいて、多めに勘定を置いて店を出ていった。

冬吉は何も言わず、じつと背中を見送るだけであつた。

冬吉は、昨夜、伊八を追って走つた道を、今度はゆっくりと歩いて進む。

伊八が襲われた場所に差しかかった。

すでに気づいていた。

自分を観ている二人の視線にである。

一人は川縁の暗闇から、もう一人は後方から、店を出てからずっとつけていたのだ。

川縁から道の真ん中に出てきた男が、無言で太刀を抜いた。

最初は、じりじりと、少しずつ詰め寄つた。

無意識に、ちろりと舌舐めずりをする。

自分の間合いの半歩前まで近づいた瞬間、飛びかかるように一気に踏み込んだ。

逆風の太刀の一撃目は籠手を狙う。

そのぎりぎりの間合いでは、冬吉が使う大脇差の間合いには入っていない。

振り下ろされた太刀はかわされた。

逆風の太刀であると思っていれば、これをかわす必要はない。

男は意外には思わなかった。

未だかつて立ち合つたことがないほどの剣士が相手なのである。

だが、ここからの冬吉の狙いが仮に、逆風の太刀が想定する面への一撃でなくとも、

男の逆風は必ず左腕を切り落とす自信があつた。

変幻自在の技であるのだ。

振り下ろされた太刀が跳ね返るように、地面すれすれからすくい上げられる。跳ね上がった太刀にはさほどの力はない。

思い切り振り下ろした後であるから当然で、この技は相手の攻撃の勢いを利用して腕を切りとばすのだ。

しかし、すくい上げられた太刀は冬吉の腕を切りとばす前に止まった。

冬吉がとつさに半分まで左手で抜いた鞘が、刃を受けていた。

刃が止められた次の刹那、男の左腕が太刀を持ったまま切り離された。

大脇差が風車のようにくるりと回り、下から切り上げたのだ。

男が悲鳴をあげることがなかった。

腕が斬られたことに気づくよりも早く、絶命したのだ。

左腕を切り落とした冬吉の切っ先はそのまま止まることなく、袈裟斬りに振り下ろされた。

流れるような、というよりも、疾風のごとき太刀筋であった。

仰向けに倒れ、月明かりに照らされた死体の顔は、なぜか安らかな目をしていて。

翌日、本所の界限は、二日続けての辻斬りの犯行に騒然となった。

朝には帰った伊八も、血の付いた着物を黙って洗ったお静も、当然勘づいているはずだが、何も言わなかった。

呼び出しは、店を開けるにはまだ早い時刻であった。

昼間から呑んだくれるやつらも本所には多いが、『草間』が開くのは黄昏の頃である。

三日に一度は道場通いをする冬吉は、他にもいろいろとすることがあり、夕餉の頃からしか店を開けないのだ。

やってきたのは、長山ではない。

彼よりは小柄な武士であった。

町人の冬吉に慇懃すぎる態度で同道を願う。

冬吉は身支度をしてついていった。

行き先は火付盗賊改方の役宅である。

なぜか勝手口から庭に通された。

地べたに正座して待つと、同道した小柄な武士とともに長山が現れた。

着流し姿の長山は、縁側に行儀悪く座りながら、キセルを使い始めた。

冬吉が怪訝に思ったのは、職場である役宅での長山の服装と、その態度である。

まだ職務中のはずで、番方であり多少荒っぽいと言われる火盜改の同心といえども、こんな様は流石にないように思われたのだ。

先に口を開いたのは、小柄な武士の方であった。

こちらは長山の脇、やや後ろできちっと居住まいを正して正座している。

「草間冬士郎殿。我が甥の仇を討つてくださったこと、まことにかたじけない」

長山の態度は気になるが、それよりも、上座からとはいえ、両手をつけて頭をさげるこの男の態度にはもつと驚いた。

「一昨日、最後に斬られた男はこの火盜改与力、山根十内が甥、山根彦四郎と言う。剣一筋の実直な男で、父親の咎で浪人となったものの、剣術で身を立てられるように取りはからうつもりであった。わしからも礼を言う」

「長山様……」

同僚の仇を討つてくれたから、と言うには言葉遣いが違う。

そもそも、長山が同心で山根が与力なら、山根の方が上役であるはずだ。

何か気づいたのか、山根が顔を上げた。

「お頭、狐につままれたような顔をしておいでです」

「お頭？」

火盜改の与力がお頭などと言うとしたら一人しかいない。

長山はにやりとしてから、大きな声で笑い出し、一度顔を改めたが、我慢できぬというていで、人の悪い笑みを浮かべてから名乗った。

「火付盜賊改方頭、長谷川平蔵である」

「あなた様が……」

「ま、肩書きをつけて格好つけてみたところで、若え頃は本所の破落戸、いい歳になつても夜はただの吞兵衛よ。おめえさんほどには姿を偽つてはおらんかったらう？」

ガハハと再び笑い出した平蔵に、数瞬呆然としたが、ほどなく、つられるように冬吉もくつくつと控えめに笑った。

それから、笑顔を崩さずに口を開いた。

「私のことも全てご存じなので？」

「安心せい。問い合わせたりはしておらぬよ。江戸詰の藩士が、わしの倅と同じ道場に通っていてな。七年前の話を聞いたことがあっただけよ」

手をひらひらとさせながら、心配するなど笑う。

なんとも言えぬ、いい笑顔であった。

すると、奥から何名か女中が現れた。

「お、できたか」

美味そうな匂いが漂い始める。

「おめえさんの味噌漬けほどじゃあねえかもしねえが、うちの湯豆腐はなかなかだぜえ」

鼻をヒクヒクとさせながら、部屋に上がれと手招きする。

「下拵えをすませてきたなら、あとは婆さんだけでも店はやれるんだらう？ たんと呑んで今夜は泊まってけ。あの威勢のいい婆さんには、遣いを送って安心させてやるから」

豪快に笑う平蔵を眺めながら、冬吉も笑い、頷いた。

山根も笑っている。

静かな黄昏の空には雪がちらつき始め、冬の夜が始まるうとしていた。



冬吉もお静も呆れていた。

あれから平蔵は、三日に上げずに『草間』に呑みに来るのだ。

火盗改の役宅がある麴町と『草間』のある本所では、片道で半時（一時間）はかかる。

元々本所は若い頃の平蔵が無頼の青春時代を過ごした地域で、他にも馴染みの店があるらしい。

遅くなったたり、飲みすぎたりした時には知人の家に泊めてもらうのだとか。

旗本で四十過ぎの勤め人としては、相当にろくでもない男と言えよう。

だが、人なつっこく、気取らない性格のせいか、『草間』の客とはあつという間に打ち解けてしまった。

伊八などはもう昔馴染みのように一緒に呑み騒いでいる。

『草間』では、長山平三郎の偽名をそのまま名乗っているが、身分は諸方で代稽古を務める剣術使いの浪人と言っている。

普通、よほど実家が裕福でもない限り、浪人の生活は厳しいものだが、いくつもの道場で代稽古を務めているとなれば、『草間』で呑んだくれる程度の収入はあつてもおかしくはない。『草間』の客は、そう納得したようだった。

たまには、与力の山根が現れることもある。

こちら浪人ということにはなっているが、生真面目なこの男が現れるのは、だいたいは御用のことの手ついでであった。

酒も平蔵の半分も呑まないで、菜飯や湯漬けを食べる。

小柄なわりに大食漢で、どんぶり飯三杯は胃袋に納める。

山根は平蔵の懐刀で、最も頼りになる与力であるらしい。年季の入った現場の男である。

そんな対照的な二人を、冬吉は好きになっていた。

平蔵の深情けには辟易しているが、身分や年齢の差を超えて、何か通じるものがある

のだ。
 そして今日も長谷川平蔵はなめろうをつつきながら、いかにも美味そうに、ぬるめに爛をつけた酒を舐めている。

辻斬りを斬った翌日、役宅で湯豆腐をつついて呑んだ時、冬吉は事件の全容を聞かされた。

下手人の名は清水又九郎しみずまたくわうと言った。
 旗本の三男であった。

家督は進十郎しんじゅうろうという若い甥が継いでいて、歳に近い叔父と甥の関係は良好であったという。

しかし、兄弟のように仲の良かった叔父と甥の間に、女が入り込んだ。

叔父の女を甥が横取りしたのである。

それでも、又九郎は甥を許したのだが、当の娘の方は己おのれのふしだらを責め、自害してしまったのである。

甥を恨むこともできず、さりとて娘を忘れることもできない又九郎は、心を壊し、辻斬りという畜生道を進むこととなった。

又九郎が辻斬りの下手人だと平蔵が知ったのは、進十郎に相談されてのことである。

長谷川家と清水家は元々、又九郎の父親の代から付き合いがあった。

進十郎の母は高家の血筋であり、簡単には罪に問えない。

平蔵は自分が又九郎を斬るつもりでいた。

本来であれば、背後からつけていた自分が、間に入って又九郎を斬るつもりだった。それを冬吉が斬った。

『草間』に通ってくるのは、自分に代わって又九郎を引き受けた、冬吉に対する贖罪しんぐいの気持ちもあつてのことなのだろう。

「誰もがお前さんのように、曲がることなく生きられるというわけではない。又九郎は乱暴者ではあったが、根は優しい男だった。心根の優しさがかえって心を壊したのだ」
 帰り際に平蔵はそうつぶやいた。

鬼とはいえ、酒を浴びねば洗い流すこともかなわぬ思いを抱えることはあるのだと言う。

帰っていく平蔵の、頼りない月の明かりに照らされる背中を、冬吉は無言のままに見送っていた。

居酒屋縁談始末

イギリスの経済学者トマス・ロバート・マルサスはその著書『人口論』において、居酒屋の存在を痛烈に批判した。

貧しい労働者に金銭を与えても、結局その金は一時の享楽のために居酒屋に消え、貯蓄はできず、したがって彼らが結婚することはない、などと繰り返し書かれている。

筆者はこの本を読んだ当時、三十代の独身で、結婚の予定も立たず、生活も極めて不安定であった。大変胸に突き刺さった覚えがある。とはいえ、本当に居酒屋に通っていると結婚できないものなのであるうか。私は今では所帯を持っているし、妻と知り合ったのは居酒屋である。

冬吉の営む『草間』でも、そんなことがあったりもする。

今日も『草間』はなかなか盛況であった。

この店の常連第一と言える大工の伊八に、結構離れている麹町から三日に一度はわざ

わざやってくる長山平三郎こと長谷川平蔵。

他にも、よく見る顔がいくつも並んで呑み騒ぎ、それに新顔の者もちらほら。

しかし、その中に、一見居酒屋には不似合いな連中が交ざるのが、『草間』の特徴であり、悩みであった。

店の中、入れ込み座敷の一角が妙に騒がしい。

そして、他の客、特に伊八などはそちらの方をチラチラ見ながら、少々不機嫌に酒を舐めている。

そこにいる連中は酒を呑んでいない。

食べ物も漬物程度しか注文せず、水や白湯を口にしながら、ひたすら喋っている。甲高い声は男のものではない。

歳若い娘達が集まって、素面のままで騒いでいるのだ。

色男の癖に女が苦手な冬吉だけでなく、店の常連達も迷惑がっていた。

多くの客は、冬吉の作る美味い肴で静かに呑む、もしくは男同士で下世話な話でもしながら呑み騒ぐために『草間』にやってきている。

そんな客達にとっては、小うるさい若い娘達が集まって騒いでいるというのは、あまり嬉しいことではなかった。

店にとつても、酒も吞まず、食べ物もたいして注文せずに長居する彼女達は、至極迷惑なのである。

そんな一角に、今日はさらに異質な席が一つ。
冬吉日当てに店に通う追っかけ娘の一人が、壮年の男の前に座らされ、厳しい目で睨まれている。

娘の名はお里。

追っかけ娘の中では最年長で二十二。

この時代にあつては、行き遅れと言われる歳である。

壮年の男はお里の父親で、植木職人の菊次郎。

何人もの弟子を抱え、大名屋敷の庭木の世話もまかされる腕利きである。

『草間』の近所に住んでおり、開店直後はよく店にも顔を見せたが、娘が来るようになってからは、ご無沙汰であつた。

『草間』ではたまにある。

追っかけ娘の父親達が押しかけ、その場で説教を始めるのだ。

「嫁入り前の娘が、居酒屋に連れ立って通うなど、聞いたこともない。そんなんでは、いつまで経っても嫁の貰い手がないではないかっ！」

顔を真っ赤にしながら、菊次郎が怒鳴る。

娘は顔を背けているが、叱られて首を垂れているわけではない。

父親には何も答えず、黙っている。

唾を飛ばしてくるので、それを避けているだけであつた。

他の娘達はそちらをチラチラと見るが、気にせずには愛のないお喋りを続けている。

追っかけ娘達は、父親に反抗的な娘達の集まりなのだ。

言ってしまうば、父親世代の男達のことをどこか馬鹿にしている。

怒鳴り散らしたところで、公衆の面前で折檻するわけにもいかないし、店にも迷惑はかけられない。

だいたい二言目には「嫁入り前の娘」という言葉が出てくるが、そう言うなら、条件の良い見合い話の一つでも見つけてこいと思うのだ。

本来なら、父親や母親、周辺の大人達が良縁を持つてくるもので、それがなければ、連れ立って歩き回っている。

男なんて居酒屋に来れば、こんなにたくさんいる。

それなのに、うちの親父は、まともな見合い話の一つも持つてこない。

そういう思いで父親を侮り、集団で居酒屋に入入りするなどという、暴拳とも言える行動に出ているのだ。

どうせ、良縁がなく、貰い手がないのなら、町で噂の美男子を追っかけ回して、うさを晴らしてもいいじゃないか。

追っかけ娘達のお喋りは、そんな不満を愚痴り合うものになってきた。

わざわざ、菊次郎に聞こえるようにである。

菊次郎は顔を真っ赤にして黙ってしまった。

菊次郎は腕の良い植木職人であるが、口下手だ。

人脈を作っていくことが下手であり、たまたま昔の同僚や師匠のついで、大名屋敷の庭の手入れなどの仕事を受けることはできているが、娘に良縁を持ってこられるようなつながりは持っていない。

一家の主としては、甲斐性無しと言われてもしょうがないことなのだ。

江戸では女性は男性の半数しかいない。

本人が家によほどの問題でもない限り、嫁入りが難しいなどということは無いはずなのだ。

「まったく、嫁の貰い手がないつてのは面倒なことだなあ」

娘達に聞こえないよう、控えめな声で、長山平三郎がつぶやいた。

長山平三郎こと長谷川平蔵には、息子二人に娘が一人いる。

下の二人はまだまだ子どもだが、嫡男の辰蔵は、そろそろ嫁をもらってもいい年齢だ。武家の嫁取りというのもなかなか難しい。そろそろ現実的な問題として、息子の嫁取りを考えないといけないので、意外と真剣にこの話を聞いていた。

そしてもう一人、この話に耳を傾けていた、平蔵の隣に座る客が、大きなため息をついた。

平蔵や大工の伊八と車座になって呑んでいた男である。

名は左近次と言う。

左近次はキセルを作る職人である。

キセルは煙草を吸うための道具だが、凝った意匠を加えたものを持つことは、喫煙者の憧れであった。

左近次はなかなか腕の良い職人で、長谷川平蔵は『草間』で知り合ってから左近次の作るキセルを気に入り、早速一本こしらえてもらって愛用している。

雁首がんびに小さな飛龍をかたどった細工が施されており、伊八などは煙草も吸わないのに羨ましがっている。

ほんつ、と、その作られたばかりのキセルで灰皿を叩いて、吸い終わった煙草を落とした平蔵は尋ねた。

「どうしたね？ 左近次さん」

「いや、まあ、『草間』にはこんなに娘っ子がいるのに、おいらにやあすっかり縁がないんだよなあ」と

再度深いため息をつきながら、左近次は少々涙ぐんでそう言った。

「そりゃあね、店の者が言うのもなんだが、毎日うちで呑んでるようじゃね」

手厳しくお静が言う。

圧倒的に男性の方が多い江戸では、独り者は多数派ではある。

妻を持てる者の多くは、しつかりした親の後ろ盾があるか、将来有望で安泰な者だが、毎日居酒屋で酒を食らう長屋暮らしでは難しい。

三十路も過ぎた男がこれでは、なかなか縁談がないのも仕方がない。

両親も師匠も亡くなって天涯孤独の境遇である。

しつかりした男なら、知人の誰かが取り持つてくれるということも考えられるが、このていではそうもいかない。

「まあ、『草間』に通つて女房持ちなんてのは、そうそういないからなあ。長山の旦那は？」

「俺は妻もいるし、息子二人に娘も一人いる」

伊八の質問に思わず平蔵は答えてしまったが、これはまずかったと平蔵は内心で焦る。

複数の道場で代稽古をしている浪人という、偽りの身分で『草間』に通う平蔵だ。

独り者ならそれで居酒屋通いをするのは、左近次ほどの依存症でなければ問題ないが、流石に妻に子ども三人を養つていとなれば話は別である。

実家がよほど裕福なのか、女房や子どもも働きに出ていなければ、浪人の家計は成り立たない。

つまり、偽っている身分通りなら、よほどの穀潰しでなければこんなことはできない。平蔵の人となりを見れば、身分を偽っていることに気づかれかねないのだ。

少し離れたところに座っている、人相の悪い老人がジロリと平蔵を睨み、なぜかぶつと噴き出して、目を逸らす。

平蔵は気づいていない。

とはいえ、伊八は気にもせず話を続けた。

「独り者の気楽さつてのもあるぜ。じゃなきゃこんな美味いもん毎日食えねえだろう」

「そら、伊八つつあんは……」

左近次は何かを言いかけてやめた。

お静が怖い顔で睨んでくる。

伊八には以前は女房がいたのだが、流行病で亡くしているのだ。

女房を亡くした伊八はしばらくの間は、働きもせず家に引きこもり、酒浸りの生活

であった。

貧乏長屋に移り住んでからも、それは変わらなかつた。

見かねて注意をしても聞かない伊八を心配していたお静は、冬吉が『草間』を開いた時点で、真つ先に引つ張り出して連れ込んだ。

せめて美味いものを食べて呑むようにしろと、言い聞かせたのである。

今では、本来の明るさを取り戻し、大工としての仕事に戻ってしつかり働いてもいるが、それだけ女房への思いが強かつたのだ。

『草間』に通うようになってからも、呑みすぎると、泣き上戸しやうとになってしまふことがある。お静に睨まれた左近次は、バツが悪くなり、頬ほおをかきながらつぶやく。

「おいらがもうちょっと、顔さえ良ければ……」

「いや、そういうもんでもねえだろうさ」

左近次のつぶやきに、呆れたように平蔵が言う。

「それを言えば、冬吉さんなんて、とつくに女房持ちだろうよ」

「いっ!?」

伊八の言葉に、冬吉がぎくりとした。

仕込みをしていた、小ぶりな蕪かぶを落としそうになる。

「ば、馬鹿、そんなことでかい声で言ったら……」

平蔵が慌てて伊八の口を塞ふさごうとするがもう手遅れである。

「はい、私で良ければいつでももっ!」

「いや、私、私だってばっ!」

「抜け駆けはなしっ! そういう約束でしょう?」

追っかけ娘達が大騒ぎである。

と言つても、これまでに数人いた、本気で押し掛け女房を決めこもうなどという思い詰めた娘達については、お静がきつい説教をした上で追い出し、出入り禁止にしている。

なので今いる追っかけ娘達は、そこまで本気とは思われないのだが、こんな話をしてしまつと大騒ぎになる。

「お前も、冬吉さんに嫁ぎたいと言っても言うのかっ!」 お前に冬吉さんの女房が務まるわけがないだろうがっ!」

娘達の騒ぐ様さまを見た菊次郎が、語気を強めた。

菊次郎も、少し前までは『草間』でよく呑んでいたのだ。

冬吉は姿形だけでなく、人となりも、技も一流の男である。

若い居酒屋の店主という身分ではあるが、これだけの男に嫁げるほどに、娘を仕込んでいたつもりはない。

それだけではない。菊次郎でなくとも、察しの良い常連は皆気づいている。冬吉は、どここの藩かはわからないが、元は十分。細かい所作や言葉遣いに、それが表れている。人の格が違いすぎる。

身分は今も町人だが、教養があり、技もあり、物事をよく知っている男だ。普通の町娘であるお里などの手に負える男ではない。

怒鳴りつけられたお里は、一瞬だけ父親の顔を見てから、再びぷいとそっぽを向いた。「そんなわけない。でも、心に決めた男がいるなら嫁になど行かなくていいと言ったのはおとつあんだよ」

目を合わせずにそう言った。

菊次郎は二の句も継げなかった。

確かに、父親としての威厳や寛容さを示すためにそのように口にしたことがある。

『武士に二言はない』

などと言うが、武士道の考えというのは、江戸の町民にも浸透し、男性全般の倫理観にも影響を及ぼしていた。

職人である菊次郎も、『男に二言はない』と考えている。

しかし、先ほどの言葉は、お里がまだ十四の時に言ったことである。

まさか覚えていたとは思わなかった。

驚きのせいか、菊次郎はお里の放った重要な言葉の意味を理解していなかった。

『そんなわけない』

つまり、冬吉と所帯を持ちたいわけではない。

しかし、『心に決めた男がいるなら……』なのである。

心に決めた男がいるにもかかわらず、色男、冬吉の店に足しげく通うというのはどういうことか。

などと、遠くから聞いていた冬吉が考えても、わかるはずもない。

そもそも冬吉は、男前なのに女が苦手なのだ。

冬吉の手は休むことなく動いている。

小さな蕪の上下を切り落とし、ヘタのあった方から中をくり抜く。

これを酒で蒸したものに、この店の名物である鯛のなめろうを入れる。

居酒屋としては少々凝りすぎかもしれない。

江戸の居酒屋は手軽かつ安直な肴で酒を食らう店である。

せつちかな江戸っ子の気質もあり、田楽など簡単な料理を出す店が多い。

そんな世相の中で、わざわざ手の込んだ料理を出す『草間』は、料亭に行くほどの金

はないが、口だけは肥えた酒呑み達にとって、桃源郷であった。

——しかし、そんな、味のわかる客ばかりではない。

本所には、常に新顔がいる。

『草間』の客から一目でもぐりと看破されてしまうのは、中間ちゆうかんと言われる身分の者達である。

中間は武家奉公人の一種であるが、揃そろいの半被はっぴを羽織はり、脇差を腰に差しているので、一目でわかる。

だいたい素行が悪く、屋敷で賭場とばを開帳したり、居酒屋で騒さわぎを起こしたりと迷惑な連中が多かった。

『草間』にもそんな中間達が訪れることがある。

常連になる者は少ない。

素行の悪い者にとっては居心地が良くない店だからだ。

今日もそんな客がいた。

入り口近くで呑む二人組で、大人しく呑んでいたが、随分長居しており、すっかり出来上がっている。

声も身振りも大きくなってきていた。

自分の方が女にモテるだのモテないだの、くだらない話をしていたのが、なら、この場で酌をしてくれる女を口説いてこいなどとなったらしい。

なんとも無謀なことである。

二人とも小太りで、二目と見られぬとまでは言えないが、人並み以下の顔立ちである。冬吉の店でこんなことをするというのは、もぐりももぐり。

『草間』の噂すら知らぬ新参者でしかありえない。

そんな彼らが声をかけたのは、追っかけ娘達であった。

「よう、楽しそうじゃあねえか。俺達も交まじわせてくれよ」

出来上がってはいるが、まだ呂律みれつは回っている。

「はあっ？」

追っかけ娘達は露骨に嫌な顔をした。

お呼びでない。

彼女達は、見目麗みめうるわしい冬吉を鑑賞かんしょうしに来ているのだから、小太りの醜男しこおになど興味を示すわけがない。

なにより、お静との約束がある。

店の男性客とはあまり関わってはいけない、というものだ。

見ず知らずの男と口を聞き、おかしいことになっては、彼女達の父親に店が悪いと思

われかねない。

これが、娘達が『草間』に出入りすることの許される、ギリギリの線引きであった。お里がこれを娘達に言い聞かせ、納得させたのである。

もちろん彼女達は冬吉以外の男、まして醜男の中間になど興味はない。

「なんだよ、そう邪険にするなよ。居酒屋に出入りするような娘が、そんなに身持ちがいいわけねえだろ？ こっち来て酌しろよ。面白い話でもしようや」

最初に話しかけてきたのとは別の男が、猫なで声でそう言った。

こっちの方が酔ってはいる。

しかし父親を侮り、反発して居酒屋に通う娘達だ、気が強くないわけがない。

娘達はつつけんどんに言い返す。

「お呼びじゃありませんよ」

「よっぽどの色男でもない限り、口を聞くつもりもないよ。大人しく呑んでな」

「せめて冬吉さんの半分ぐらいいは男を磨いてから、声かけてきなさいな」

モテるモテないの話をしていた男に、これは容赦がなさすぎた。

二人とも顔を真っ赤にした。

「テメエらっ！ 下手に出ればつけ上がりやがってっ！」

「痛いっ！ なによっ！ 離してっ！」

後から話しかけた方が、娘の一人の手首を掴んだ。

もう片方の腕が振り上げられる。

「おやめください。この娘達は、他の客とは関わらないという取り決めで、この店の出入りを許されているんです」

咄嗟に、振り上げられた方の腕を掴んだのはお里である。

他の追っかけ娘達のこととは妹分と思っているし、お静との約束もあるから黙ってはいるなかつた。

「なんだテメエはっ！」

女の細腕で、どうにかなるものではなかつた。

お里の手は振りほどかれ、激昂した男に突き飛ばされた。

壁に強かに背を打ち付け、咳き込む。

「うちの娘に何をするっ！」

こうなつては菊次郎も黙ってはられない。

まだ、追っかけ娘の手首を掴んでいる中間にいどみかかつた。

江戸の人間は喧嘩っ早い。

暴力に弱く、舐められるような男では、人の上に立つことも難しい。

職人は特にそうだ。

「引っ込んでろっ！」
しかし、菊次郎ももう若くはない。
もう一人の中間に平手で引っ叩かれた上に、突き飛ばされた。
「おとつあんっ！」

お里が叫ぶ。

こうなると中間の方は引っ込みがつかない。

騒ぎに気づいた冬吉は、下拵えしていた蕪を軽く握りしめた。

すぐ近くで呑んでいた長谷川平蔵は、刀を引き寄せて、腰を浮かした。

大工の伊八は、いつも持ち歩いている道具袋から金槌かなづちを取り出したが、お静にお盆で頭を叩かれる。

そんなものを使って喧嘩をしたら、死人が出かねない。

喧嘩慣れしていない者ほど、意気込んで危険なことをやりがちだ。

だが、冬吉も平蔵も動かなかった。

この二人よりも早く、追っかけ娘と中間の渦中に近づいていった者がいたのだ。

「あちっ、あちーっ！」

追っかけ娘の手首を掴んでいた男が、手を離して騒ぎ出した。

しきりに、背中に腕を回してはたいている。

後ろに近寄った左近次が、自作のお気に入りのキセルから、男の奥襟の中に煙草を落とすのだ。

もちろん、つい今し方まで吸っていた、熱いやつである。

「何しやるっ！」

慌てて帯をほどき、半被を脱いで禪ぜん一丁になった男が振り向いた。

半被には穴が開いている。

その瞬間、左近次は大上段からキセルを思い切り振り下ろした。

中間には当てていない。

その眼前でピタリと止め、静かに睨みつける。

「兄さんら、この店で乱暴を働いたとなると、この辺りにはもう顔も見せらんなくなるぜ」
禪一丁の中間は動けなかった。

眼力だけで震え上がってしまったのだ。

しかし、舐められては生きていけないというのは、職人だけの話ではない。

中間も、こいつらのような不良な連中は、ヤクザ者とも関係を持ち、賭場を開いたりする。

派手に喧嘩に負けたとなると、仲間には馬鹿にされ、侮られることとなる。

もう一人の中間の手が、脇差に伸びた。